日本経済新聞　2010年8月27日（金曜日）

賃貸集合住宅で家事分担（多摩市）

孤立と「無縁」な暮らし

多摩の断面

「他人以上親せき未満」。こんな人々が一つ屋根の下で暮らすコミュニティーが生まれている。東京都多摩市関戸にある民間の賃貸集合住宅「コレクティブハウス聖蹟」。広い共有空間がある住宅に子育て世代や一人暮らしの中高年が家事などを分担しながら住んでいる。そこには高齢の行方不明者が続出している「無縁社会」とは別世界があった。

8月初め、京王線聖蹟桜ケ丘駅近くの同ハウスを訪ねると1階の共用キッチンで中年男性2人と女子高生の当番3人が夕食の準備に追われていた。月に15回ほど予約した住人が夕食をともにする。傍らの共用スペースでは予約した人が集まって談笑し、その周りを3、4歳の幼児がにぎやかに駆け回る。

居合わせた同い年夫婦（38）は「夕食の手間も省け、子どもが多くの人とふれあえる」と口をそろえ、3人の子どもがいる主婦（39）は「親が外出しても子どもを見守る人がいて助かる」と家事、育児の負担軽減を喜ぶ。

一人暮らしの女性（65）は「周りの人たちとほどよい距離でつきあえる」とほほ笑み、両親と死別した女性（54）は「ドアを開けると子どもの声が聞こえる暮らし」がお気に入りだ。休日は部屋から出ない生活だった男性（69）も今は「人々とふれあう生活はいいもの」としみじみ語る。

オーナーの小林攻洋、惠久子夫妻はアパートの建て替えに際し「住む人たちが交流し、地域と共生する住宅を」と考え、集合住宅の住人が家事などを分担するコレクティブハウスに関心を持った。

北欧で生まれた新しい暮らし方の普及を目指す特定非営利活動法人（NPO法人）のコレクティブハウジング社（東京・千代田）と提携、建物の設計や暮らし方の企画の支援を得た。同NPOとオーナーは「入居希望者も交えた話し合いを30回以上重ねた」（NPO理事の狩野三枝さん）。

お金で買えない安心感

昨春完成した地下1階、地上2階のハウスはモダンな外装に、内部の広い廊下や住戸の床などに木質建材を使い潤いある生活を演出している。ワンルームから2LDKの居室には18世帯31人が住む。調理、食事、談話用の共用スペースや洗濯室、多目的の和室、庭や屋上菜園までを共用、定期的な話し合いで管理運営している。

まだあまり例がない民間による単独のコレクティブハウス。建設に踏み切った小林攻洋さんは「住人が汗を流してよりよい暮らしの場をつくり、それが住宅の価値を高める。こうした人々との出会いが一番の財産です」。お金で買えない安心があり、一人でも孤立しない暮らしがある同ハウス。そこに少子化社会、無縁社会に対処する一つの答えがあるといえないだろうか。

（編集委員　鈴木純一）

調理する人、談話する人、遊ぶ子どもでにぎやかな共用スペース

コレクティブハウス聖蹟